

当代きっての能楽師浅見真州さんと、友枝昭世さんがシテを務め、同じ演目を連続二夜見せる日経能楽鑑賞会に初めて行ってきました。5年目の今年の演題は「天鼓」。お二人共いつも見応えがあって素晴らしいので、それだけでもワクワクするのに加えて、この「天鼓」をどのような解釈のもとに、どんな演技をして、どんな違いが出てくるのか、舞台装置や装束はいかにと興味深々でした。

開演と同時にまず舞台のしつらえの違い。これは見終わって考えるとお二人が能のどこに重点を置いたかが明瞭に分かった気がしました。浅見師はシンプルな鞆鼓台が舞台の正先にあり、観世流の常套な置き方でした。友枝師は脇正に一畳台が置かれその前、目付柱近くに鞆鼓台が置かれました。（私は喜多流の天鼓を見るのは初めてなので、これが普通なのかもしれません）

能「天鼓」は知る人が多いので簡略に云えば、王伯の妻は天から降る鼓が胎内に宿る夢を見てから子供を授かり『天鼓』と名付けます。その後鼓も降ってきて、天鼓少年がその鼓を妙なる音色で打つので、帝がその鼓を召し上げようとすると、天鼓はそれを拒み、捉えられて呂水に沈められます。しかし王宮に入った鼓は誰が打っても鳴らないので老父・王伯なら鳴るかもしれないと王宮に呼び出されます。さまざまの思いを込めて父が打つと再び鳴ったので、帝は父親の心情に動かされ、褒美を与え帰宅させます。（ここから後場）また帝は天鼓少年を吊うため管絃講を催すと天鼓の亡霊があらわれ、見事に鼓を打ち、舞楽を楽しげに舞って、帝の命令に背いた罪が許されたことを喜ぶというストーリーです。

物語の展開は観世流であれ喜多流であれ違いはありません。ところが二夜続けて、国立能楽堂の同じ席から見ると流派の違いだけでなく、演者によっても曲の感じが違って、このような企画は、やはり贅沢な能鑑賞法の一つだと思いました（高いチケット代の元が取れた感じ！）。

まず前場のシテ（老父）の謡いや、特に地謡の謡いっぷりが全然違うのには驚きました。浅見師は三の松で子を失った親の悲しみを切々と謡い〈サシ〉、その後の〈居クセ〉では地謡が低音を利かせながら、不条理な悲しみをしみじみと謡うので、エ〜天鼓ってこんなに深い曲だったのかと認識し感動しました。

翌日の友枝師の方ではまず三の松での〈サシ〉謡いの部分などが省略されていました。〈居クセ〉の地謡も前日に比べると、とてもあっさりしていて拍子抜けする程でした。ところがその後、「玉の階（きざはし）」「玉の床に」「老いの歩みも足弱く……、龍顔に御涙を浮かめ給うぞありがたき」と、例の一畳台を宮殿に見たてて上り、鞆鼓台で鼓を打つのですが、このあたりは友枝師の真骨頂を見る名演で私は胸が震えるほどでした。老父の諦めと悲しみが宮中に歩む所作、鼓を打つ姿に滲み出ていて、さすが！でした。そして一畳台が置かれていた意味にも納得しました。

後場のシテ（天鼓少年）もかなり違いがあり面白く思いました。浅見師の方は『弄鼓（ろうこ）之楽』という小書付きで、楽がよりリズムカルに。舞台縦横に、鮮やかで切れ味の良い舞で、特に終わり〈キリ〉のところでは面を付けていると思えない程、敏捷で躍動感のある舞に、すっかり魅了されました。

友枝師の方は舞台に一畳台があって、動ける広さが少ないので趣が違い、とても優美な舞でした。私は中正面に座っていたので、一畳台に遮られて足元が良く見えず、もう少しじっくり舞を見たかったなというのが本音ですが、とても美しいと思いました。

いずれにしても、このように一つの曲を連夜見ることによって、まるでプリズムに当たったように、能がいろいろな角度から立体化して見えたので、「競演」というより「響演」の効果があるような印象でした。

座席のことで云えば、毎回ながら、これが結構難しい。曲により見やすい場所が違うし、良い席のつもりが前の座席に大きな人が座ったり。能楽博士といわれるほど能に詳しい山崎有祐一郎さんは「一番良い席は目付柱の延長線上。目付柱を透き通して見える人が本当に能を見ている人」だと話されています。私などなかなかどうして、その心境までゆかず、観賞者としては序の口かと思う次第です。

（ぼつぼつですが、このコラムを続けることになりました。拙ない文ですがよろしくお願い致します）尾崎